

成人の趣味における興味の深まりと学習環境の関係

—アマチュア・オーケストラ団員への回顧的インタビュー調査から—[†]

杉山昂平*1・森 玲奈*2・山内祐平*3

東京大学大学院学際情報学府*1・帝京大学学修・研究支援センター*2・東京大学大学院情報学環*3

成人による趣味の追求をインフォーマルな学習環境はいかに支えるのだろうか。趣味における興味に着目してきた先行研究に対し、本研究の目的は「興味の深まり」という新たな概念を提案し、「成人の趣味活動において学習環境との関わりによっていかにして興味が深まるのか」を明らかにすることである。趣味活動の事例としてアマチュア・オーケストラを対象とし、オーケストラ団員15名に対して回顧的インタビュー調査を行った。分析の結果、興味の深まりには(1)音楽的な無自覚からの脱出、(2)上達・達成へのとらわれからアンサンブルへ、(3)参加すること自体の価値を見いだす、という3類型が存在し、それぞれの興味の深まりは(a)活動形態の異なる共同体への移動、(b)活動理念の異なる共同体への移動、(c)目標を焦点化する役割付与、という学習環境との関係性において生起することが明らかになった。

キーワード：成人，趣味，興味，インフォーマル学習，学習環境，質的研究

1. はじめに

1.1. 成人が趣味を追求することの価値

長寿命化をむかえる21世紀の社会において、成人にとっての趣味の価値が高まっている。成人にとって趣味は、余暇の場において自らの能力を発揮し自己実現を果たす機会である (JONES and SYMON 2001)。長寿命化を受け、経営思想家は「教育→仕事→引退」という人生モデルを脱却し余暇を活用したライフデザインを説くようになっており (GRATTON and SCOTT 2016)、また日本政府の高齢社会対策や生涯学習社会の実現に

向けた政策においても、社会参加としての趣味の促進が位置づけられている (内閣府2012, 文部科学省 2016)。成人の趣味を支える社会づくりが求められていくだろう。

趣味は「ある人が生活に必要な収入を得ることを目的とせず自発的に参加する余暇活動で、特に専門的かつ長期的に追求される点で一過性の気晴らしから区別されるもの」と定義できる (c.f. AZEVEDO 2017)。例えば、質の高い演劇を追求し仕事以外で「輝く場所」となっていた社会人劇団の活動は趣味である (高橋 2015)。だが、こうした社会教育の枠組みの外部で行われる趣味やアマチュアの文化活動は、これまでの生涯学習研究では明確な位置づけを与えられてこなかった (歌川 2008, 杉江 2009)。

1.2. 学習科学における先行研究

しかしながら注目すべきことに、近年の学習科学における学校外学習研究が趣味を扱い始めている (BARRON and BELL 2015)。例えば、AZEVEDO (2013) はアマチュア天文学のエスノグラフィーを行い、趣味における興味を支える環境の特徴を明らかにしている。それによれば、興味にもとづく天文学実践の維持・継続は、(a) 望遠鏡や文献などの豊富な物質的インフラストラクチャー、(b) 観測スポットや天文学クラブと

2017年7月21日受理

[†] Kohei SUGIYAMA*1, Reina MORI*2 and Yuhei YAMAUCHI*3 : Relationship between Interest Deepening and Learning Environments in an Adult Hobby: A Retrospective Interview Study of Amateur Orchestra Musicians

*1 Graduate School of Interdisciplinary Information Studies, The University of Tokyo, 7-3-1, Hongo, Bunkyo-ku, Tokyo, 113-0033 Japan

*2 Center for Student Learning and Research, Teikyo University, 359, Otsuka, Hachioji-shi, Tokyo, 192-0352 Japan

*3 Interfaculty Initiative in Information Studies, The University of Tokyo, 7-3-1, Hongo, Bunkyo-ku, Tokyo, 113-0033 Japan

いった複数の場・実践共同体，(c) 天体カタログや雑誌の特集による短期的・長期的な追求の構造化，(d) 互いの興味を把握した趣味人どうしの助け合いといった集合実践への参加支援，によって支えられていた。このほかにも，実践の道筋 (AZEVEDO 2011)，学習の生態系 (BARRON 2006, CORIN *et al.* 2017)，構造的関係性 (BRICKER and BELL 2012) といった，趣味を扱うための理論的枠組みが提起されている。将来的に成人の趣味を支える学習環境デザインを行っていくためにも，基礎研究として趣味を支える学習環境のあり方を明らかにすることは有効な戦略である。

1.3. 興味の学習と学習環境の枠組み

先行研究は，趣味における「興味の学習」とそれを支える「学習環境」の関係性に特に着目している。興味とは教育心理学における構成概念としての個人的興味である。これは「対象に何度も関与しようとする認知的・情動的な動機づけの傾性」と定義されており (RENNINGER and HIDI 2016)，自発的な活動としての趣味の本質をなすと同時に，学習され変化する性質があると考えられている。

趣味における興味の学習は，非意図的に起きるインフォーマル学習である。すなわち，「仕事，家庭生活，余暇に関連した日常の活動の結果としての学習」(山内 2016) であり，趣味の実践者にとって必ずしも「学習」としては意識されていない。しかし，旅行を楽しむうちに外国文化に興味を抱くというように，非意図的な興味の学習によって趣味はより面白くなっていく (LIU and FALK 2014)。

興味の学習を支える学習環境を，本研究はAZEVEDO (2011)の「実践状況」の定義を参考に「趣味が実践される状況において，興味の変化に影響を与える，身体的，物質的，文化的，共同的，制度的な要素」と捉えている。前述したAZEVEDO (2013)の場合，望遠鏡のような物質的道具から，天文学クラブのような共同的，制度的な集団も研究者によって「学習環境」と捉えられる。

1.4. 先行研究の課題と本研究の提案

成人の趣味を支える学習環境について解明するうえで，現時点での先行研究は「長期的な興味の学習」という，成人において顕著になるプロセスに焦点化していない課題がある。余暇の社会科学的研究であるレジャースタディーズによれば，成人が趣味を長期的に継続するなかで，趣味への主観的な認識や意味づけの変化が起きる (STEBBINS 1992)。しかしこれまでの研究

は，若者の趣味を扱うにせよ (AZEVEDO 2011, BARRON 2006, BRICKER and BELL 2012)，成人の趣味を扱うにせよ (AZEVEDO 2013, CORIN *et al.* 2017)，研究対象者が趣味を5年以上長期的に継続していたとしても，その中で長期的な興味の学習に焦点化した分析は行っていない。

それゆえ長期的な興味の学習とそれを支える学習環境の関係の解明が求められるが，その際に課題となるのが興味の学習を表現する概念の不足である。これまで，興味の学習は「興味の発展 (interest development)」の概念によって表現されてきた (RENNINGER and HIDI 2016)。これは「ある対象に興味を抱くようになる過程」を指す。例えば，楽器演奏者が新しく「指揮」に興味をもったとき，それは興味の発展である。だが，「指揮」への興味がそれまでどのような興味を抱いていたからこそ発展したのか，あるいは「指揮」への興味が今後どのように変化していくのか，といった長期的な興味の学習は「興味の発展」の概念では説明できない。あくまで「新しい興味」を抱いたこと自体しか表現できないのである。

そこで，本研究は新しい概念として「興味の深まり」を提案したい。これは「いったん抱かれた興味をもとにして，同一領域内の新たな興味へと変化していく過程」である。例えば，「指揮」への興味が発展した理由が「演奏」への興味だけでは飽き足らなくなったためであった場合，それは音楽という領域において演奏から指揮へと興味が深まったと捉えられる。一方で，楽器演奏者が「サッカー」に興味を抱いた場合，何かしらの間接的な媒介を通して音楽からスポーツ領域へと興味が広がっている。図1に示したように，それまで抱いていた興味とは別の領域で興味が発展することは「興味の広さ (breadth of interest)」を指すが，同一領域内で，それまで抱いていた興味との連続性のもと新しい興味が発展することは「興味の深さ (depth of interest)」を指すのである (AINLEY 1987, ITO *et al.*

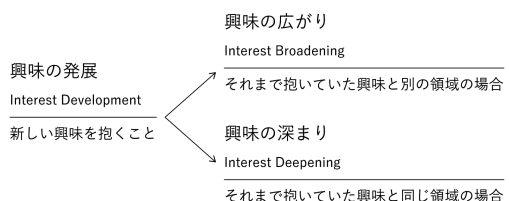


図1 興味の学習を表現する概念

2013). 同一領域内でも興味の深まりには様々な方向性があることが考えられるが、まずは着目する方向性を限定しないことで、長期的に趣味を継続する成人とそれを支える学習環境の関係の実態を明らかにできるだろう。

1.5. 本研究の目的

以上の議論から、本研究は「成人の趣味において、学習環境との関わりによっていかにして興味が深まるのか」を明らかにすることを目的とする。

2. 方法

2.1. 調査協力者

本研究では、成人によって長期的に継続される趣味の事例としてアマチュア・オーケストラを選択した。アマチュア・オーケストラは学生から社会人まで幅広い年代層が参加する趣味であり（畑農 2015）、スポーツと異なりけがや身体的衰えによる引退が少ない。また、競技ではなく段級位制も存在しないため「勝利」や「昇段・昇級」という目標が存在せず、個々の興味に活動が委ねられている。これらの特徴から、長期的な興味の深まりを研究するうえでアマチュア・オーケストラは適切な対象であると考えた。

アマチュア・オーケストラの主な活動内容は、定期的に演奏会を開くことである。その本番に向け、オーケストラ団員たちは毎週の練習を数ヶ月にわたって続けていく。

本研究では、アマチュア・オーケストラに所属した経験のある人をアマチュア・オーケストラ団員とみな

した。3.1.2.の理論的サンプリングの結果、最終的な調査協力者は表 1 に示す15名となった。

2.2. 調査手法

2.2.1. 回顧的インタビュー

本研究では、アマチュア・オーケストラ団員に対して、興味の深まりの経験について回顧的インタビュー調査を行った。回顧的インタビューで得られるデータは団員が記憶し言語化できる範囲に限られるものの、10年以上に及ぶこともある長期的な興味の深まりを捉えるために有効な手法である。実際、生涯にわたる長期的な学習を扱うために、熟達研究では回顧的インタビューが現実的な手法として活用されている（SOSNIAK 2006）。

調査は2016年6月から2016年12月の期間に行われた。1人あたりのインタビュー調査に要した時間は60分から90分程度である。インタビューの内容はICレコーダーに録音し、調査者が文字起こしを行った。

2.2.2. 質問項目

インタビューでは以下のガイドに従って質問を行った。(1) 活動経歴：これまでどんな楽器を習い、どんなオーケストラや楽団に所属してきたか。(2) 現在の興味：ふだん公演に向けて練習したり、当日本番を迎えたりするなかで、何を重視したり、面白いと思ったりして活動しているのか。(3) これまでの興味：活動のなかで重視したり面白いと思ったりすることがらは、音楽を続けていくなかでどのように変化してきたか。

(4) 学習環境との関わり：自身の音楽活動を振り返るなかで、そうした変化はなぜ起こったと思うか。これらの項目から団員の自由な語りを促す半構造化インタビューの形式をとった。

このうち(2)の項目は、1.3.で述べた個人的興味の定義をもとに作成した。それに加え(3)の項目について語られた内容の中から、特に「興味の深まり」に当たったものが分析で析出されることになる。

2.3. 分析方法

インタビューで得られたデータをもとに、グラウンデッド・セオリー（GLASER and STRAUSS 1967）を参考に分析を行った。

3. 結果

3.1. アマチュア・オーケストラ団員の興味

3.1.1. 分析過程

まず、アマチュア・オーケストラ団員が抱いていた興味について分析をおこなった。1.3.で述べた個人的

表 1 本研究の調査協力者

協力者	性別	年齢	演奏楽器	オーケストラ参加歴 / 楽器演奏歴 (年)
協力者 1	女	29	クラリネット	4 / 13
協力者 2	男	24	トロンボーン	6 / 14
協力者 3	男	63	フルート	21 / 50
協力者 4	男	25	ホルン	12 / 12
協力者 5	女	34	ヴァイオリン	14 / 14
協力者 6	男	58	マリンバほか	20 / 50
協力者 7	男	40	ヴァイオリン	22 / 29
協力者 8	女	40代	ヴァイオリン	8 / 18
協力者 9	男	44	ホルン	25 / 28
協力者 10	女	28	トランペット	9 / 12
協力者 11	女	25	チェロ	10 / 10
協力者 12	男	24	コントラバス	2 / 11
協力者 13	男	41	クラリネット	21 / 29
協力者 14	男	57	ファゴットほか	38 / 41
協力者 15	女	50代	ヴァイオリン	30 / 36

興味の定義から、興味は「関与する対象」と「対象に関与することへの認知的・情動的評価」から構成されると考え、興味についての語りに対し[対象—認知的・情動的評価]という形式で概念を付与した。さらに、同じ対象に向けられた興味を包含するカテゴリを作成した。例えば[上達と達成—楽しさ]という概念は、「演奏技術を上達することが楽しい」という興味を表し、[上達と達成—切迫感]と同じカテゴリに含まれる。

3.1.2. 理論的サンプリング

データの取得・分析と平行して、結果の妥当性を批判検討するために新たな研究協力者を募る理論的サンプリングを行い、最終的に全員所属団体の異なる15名の協力者を得た。協力者1と2は第一著者と、協力者3は第二著者と以前から面識があったため、調査の出発点として協力を依頼した。次に、分析においてオーケストラ活動歴と演奏楽器の種類が与える影響に着目したため、中学生の時からオーケストラに参加している協力者4、弦楽器を演奏している協力者5、打楽器を演奏している協力者6に、第一著者の知人および第二著者を介して協力を依頼した。さらに、オーケストラ内での役職の影響に着目したため、コンサートマスターの経験が長い協力者7に協力者5を、団長を経験した協力者11に第一著者の知人を介して協力を依頼した。同時に、学生オーケストラと社会人オーケストラの差異についても検討するため、社会人になってからオーケストラに参加した協力者8に協力者7を、地方在住の協力者9に第二著者を、学生時代から熱心に活動しているという協力者10に第二著者の知人を介して協力を依頼した。また、活動年数の少ない場合の検討のため、第二著者を介して協力者12にも協力を依頼し

た。

この時点での分析において、活動経歴や演奏楽器の差異ではなく、長期的に活動を継続するなかで団体内や団体間で立場を移動する経験が興味の深まりに与える影響に焦点が当たるようになっていた。第二著者を介した協力者13、協力者13を介した協力者14、協力者14を介した協力者15は、それぞれ20年以上長期的にオーケストラで活動しているため調査協力を依頼した。協力者14までの分析に対して協力者15の事例は新たな反例とならなかったため、その時点で一定程度の理論的飽和に達したと判断した。

3.1.3. 分析結果

分析の結果、アマチュア・オーケストラ団員の興味を表す10の概念と6のカテゴリが生成された(表2)。ここで生成された興味の概念を利用し3.2.および3.3.の分析を行うことで、アマチュア・オーケストラ団員がいかなる興味の深まりを経験しており、それがいかなる契機のもとに起きていたのか、学習環境とはどのような関係にあったのかを明らかにしていった。

3.2. アマチュア・オーケストラ団員の興味の深まり

3.2.1. 分析過程

3.1.で生成された興味の概念をもとに、興味の深まりを表す概念を生成した。1.4.で述べた興味の深まりの定義をもとに、データの中で「それまでの興味を参照したり対比させたりするなかで、新たな興味について説明している」部分を、興味の深まりについての語りと解釈した。そして、[深まる以前の興味→深まって以降の興味]という形式で、興味の深まりを表す概念を付与した。例えば「長く続けての方が色んなことに出会えるので。上手い下手はおいといて、続けてるこ

表2 アマチュア・オーケストラ団員の興味

	興味		該当人数
	対象	認知的・情動的評価	
音楽への無自覚	—	—	5
演奏の上達と達成	上達と達成	楽しさ	6
	上達と達成	切迫感	7
楽曲の理解と分析	音楽的構造の理解と分析	楽しさ	4
	社会的背景の理解	楽しさ	2
アンサンブルの享受	合奏上の役割の遂行	楽しさ	4
	合奏上の役割の遂行	責任感	3
	アンサンブルによる音楽づくり	楽しさ	5
団体活動の促進	音楽的指導	使命感	2
	運営と企画	使命感	8
参加すること自体	参加すること自体	価値	3

とに割と価値があるんちゃうかなと思うように」という協力者9の語りは、かつてもっていた「上達と達成一切迫感」という興味から「参加すること自体—価値」という興味への深まりであると解釈し、「上達と達成→参加すること自体」という概念を付与した。さらに、深まりのパターンの共通点をもとに、それらの概念を統合する概念を析出した。

3.2.2. 分析

分析の結果、興味の深まりを表す3つの概念が生成された(表3)。

(1) 音楽的な無自覚からの脱出

「音楽的な無自覚からの脱出」は、オーケストラに参加していたもののこれといった興味の対象がなかった状態から抜けだし、何らかの追求したい目標や楽しさを見いだす、という興味の深まりである。団員は活動に参加している時点である程度オーケストラに興味を抱いていると考えられるが、必ずしも音楽活動における具体的な興味があるとは限らない。それゆえ、何らかの具体的な興味の対象を見つけることが興味の深まりとなる。この深まりは5事例確認することができた。

例えば、協力者2は大学オーケストラに所属して2年目に「音楽的な無自覚からの脱出」を経験した。彼は中学高校時代の吹奏楽部や、大学オーケストラ1年目にはこれといった興味の対象をもっていなかった。だが、2年目に出演した演奏会に向けた練習の過程で、

[合奏上の役割の遂行—楽しさ]へと興味を深めていくことになる。

2012年の冬の演奏会が、ひとつの僕の転換期っていったらあれやけど。オケとか演奏とか音楽に関する考えかたが結構変わったときで。そこまで、例えば6年間の中高とやってきたりとか、1年大学オケでやってたっていうのは、な—んとなくやってた感がすごい強い。(中略)そのときにもらった曲で、後輩2人がすごいうまい子が入ってきて。その子が一生懸命、僕あまりうまくなかったから、いろいろ教えてくれるんやけど。そこでやっぱり曲も曲で、すごいストーリーのある曲で。そのストーリーから、熱く演奏するっていったらあれやけども、音にはちゃんと意味があって、こういう風に吹きましようとか。だからここはトロンボーンが聞こえるべきやからもっとこういう風に吹こうとかっていうそのアプローチを、指揮者から言われるよりも前に自分から考えて吹く。っていうのを一生懸命やりましたっていう風になってって。そこにはまっていたのが、その冬なんですよ(協力者2)

彼にとっては熱心な後輩との出会いが、音楽的な無自覚から脱出する契機となったのである。

このほかにも「吹けたし、楽譜も読めたし指も動いたから、なんかまあ吹いていたんですよ。ただ吹いて

表3 アマチュア・オーケストラ団員の興味の深まり

興味の深まり	深まる前の興味 ↓ 深まった後の興味	該当者 (協力者*)
音楽的な無自覚からの脱出	[音楽への無自覚] ↓ [合奏上の役割の遂行—楽しさ] [合奏上の役割の遂行—責任感] [音楽的構造の理解—楽しさ] [運営と企画—使命感]	1, 2, 4, 6, 11
上達・達成へのとらわれからアンサンブルへ	[上達と達成—楽しさ] [上達と達成一切迫感] ↓ [アンサンブルによる音楽づくり—楽しさ]	10, 13, 14
参加すること自体の価値を見いだす	[上達と達成—楽しさ] [上達と達成一切迫感] [合奏上の役割の遂行—責任感] [運営と企画—使命感] ↓ [参加すること自体—価値]	4, 9

たみたいな」という状態から「合奏上の役割の遂行一
楽しさ」へと興味を深めた協力者1の経験などが「音
楽的な無自覚からの脱出」と判断された。

(2) 上達・達成へのとらわれからアンサンブルへ

「上達・達成へのとらわれからアンサンブルへ」は、
かつては楽器の上達や演奏会をこなすことが興味の対
象であったが、活動を続けていくうちに上達・達成を
繰り返す日々マンネリを抱くようになり、それに対し
て「仲間たちとコミュニケーションしながらどれだ
け良い合奏をするか」という点に興味を見いだすよう
になる、という興味の深まりである。この深まりは3
事例確認することができた。

例えば協力者10は、大学オーケストラに所属してい
た4年間は「上達と達成一楽しさ」という興味をもつ
ており、またそれに追われていたという。

枠が決まったなかで一生懸命上達しようとしてたみ
たいな。「先輩がこうだからこうしなきゃ」とか。自由
じゃなく、いっぱいいっぱいになってたなっていうのが今思うと。ただ別に楽しくなかったんじゃない
で、楽しくやってたはずなんですけど、途中でや
っぱり音楽を楽しむってことを忘れて、毎日のルー
ティーンのなかで、これはやりきらなきゃいけない
からやってみたいな時もけっこうあって（協力者
10）

それゆえ、協力者10は大学を卒業したらオーケストラ
活動からは手を引こうと考えていた。しかし、たまた
ま大学4年生の時にエキストラとして参加した社会人
オーケストラの経験が転機となる。

もう結構疲れ切ってもいて、その時点で4年間やっ
て、もうこれいいなと思って、もうやらないなと思
ってたんですけど（中略）たまたま4年の時に乗っ
てみようかなってことで、エキストラでその団体に
出演をしたんですね。そうしたら練習の時に、当時
その木管陣がかなり優秀な人たちが揃ってて、学生
オケと違う空気です。社会人オケだから、1回1回の練
習にすごい集中してるなっていうのが分かって、さら
に、すごい楽しそうだったんですね。生き生き
してて。学生オケってやっぱり、週3日オケがあっ
て、それ以外の日もみんな個人練とかセッション練
とかしてて、4、5ヶ月ぐらいかけて1曲をしあげ
るみたい。結構長期戦じゃないですか。毎日毎日

練習があつてみたい。その中で社会人オケって土
日のどっちかしか使えなくて、しかもかなり短期間
で仕上げてるから、1回1回みんなすごく楽しむし、
すごく集中してるし、空気が全然違ったんですよ。
音楽づくりをしてる！みたい。生き生き感があつ
て。それにすごい、楽譜上休んでる時に、「はっ」急
に感銘を受けて。（中略）だから音楽っていうよりは
オーケストラってすごいなっていうのが。個人で家
で吹いてるんじゃないで、みんなで集まってオーケ
ストラで演奏するっていうことのがすごさっていうか、
その力ってすごいなと思って（協力者10）

それまで活動していた大学オーケストラでは出会えな
かった音楽づくりの楽しさに社会人オーケストラで気
づき、協力者10は「アンサンブルによる音楽づくり一
楽しさ」へと興味を深めたのである。

このほか、協力者13は「上達と達成一楽しさ」の興
味のもと修行のような厳しい練習の日々を過ごしてい
たが、スランプを経験することになった。だが、アメ
リカのオーケストラへの参加や新しい指導者との出会
いを経て「自分をむしろ黒子に徹してまわりに溶け込
ませるみたいなのができるようになってくると、また
俄然オーケストラが面白くなってきて」と、「アンサ
ンブルによる音楽づくり一楽しさ」へと興味を深めて
いた。こうした経験が、「上達・達成へのとらわれから
アンサンブルへ」と判断された。

(3) 参加すること自体の価値を見いだす

「参加すること自体の価値を見いだす」は、それま
で何らかの興味のもと活動を続けてきたが、そもそも
自分の生活にオーケストラに参加する時間があること
や、活動を継続することそのものに価値を見いだすよ
うになる、という興味の深まりである。この興味の深
まりを経験した団員にとって、オーケストラをすること
は「当たり前」のことではなく、それ自体が意味の
あるものだと思なされる。この深まりは2事例確認す
ることができた。

例えば協力者9は、かつては「上達と達成一楽しさ」
という興味のもと活動をしていた。だが、就職や転職
を経て地元へ帰ってからもオーケストラを続け20年以
上経過した現在、継続そのものに価値を見いだすよ
うになった。

今になってみれば、長く続けてる方が色んなことに
出会えるので。上手い下手はおいという、続けてる

ことに割と価値があるんちゃうかなと思うように。最近やっぱり40とか過ぎると思うようになってきて、それは特にこっち帰ってきてからですね。こっち帰ってきて、上手いのに越したことはないけれども、みんないろんな、それこそ仕事とか、家庭とか子育てとか背負ってやってるんやから、とりあえずは上手い下手は上手い方がええけど、続けてるのってみんなえらいよねみたいな価値観にちょっとこう変わってきてますね。 やっぱりこう、それは年取ったっていうのもあるし、自分が子育てを経験したりとか、ある程度仕事をやってきたりした中で、「みんなこんな環境でも続けてんねやから」。だから、今はやめちゃう人がもったいないと思って。特に女性なんか、結婚とか子育てとかでやめちゃうのはなんかもったいないなっていう思いが、すごくあるんですよ（協力者9）

協力者9は、仕事や家庭を抱え大変ではあるが、しかし継続していればこそ何らかの面白さに出会えると考えている。

このほかにも協力者4は、就職していったんオーケストラ活動から離れたことによって、逆に「自分の時間の一部にそれがあることが実は重要」と、オーケストラに参加することの価値を気づかされていた。この経験も、「参加すること自体の価値を見いだす」であると判断された。

3.3. 学習環境との関係

3.3.1. 分析過程

まず、3.2.で析出された興味の深まりの契機はどのような出来事なのかを概念化した。例えば、「エキストラでその団体に出演をした」ことで「空気が全然違った」オーケストラに出会った協力者10の語りには、「新しい団体への参加」という概念を付与した。付与した概念は、共通したり反対したりしている内容をもとに、

より包括的なカテゴリーへと集約していった。例えば「新しい団体への参加」という概念は、「新しい団体の組織」「外部での良い指導との出会い」などとともに、「関与する団体特性の変化」というカテゴリーにまとめられた。

さらに、1.3.で述べた学習環境の定義をもとに、語りに現れた「身体的、物質的、文化的、共同的、制度的な要素」に着目し、興味の深まりの契機がどのような学習環境との関係を含んでいたのかを分析した。例えば「関与する団体特性の変化」の場合、オーケストラという同一の活動形態をとりながらも、重視する音楽性の異なる「共同体」へ移動した出来事であるため、「活動理念の異なる共同体への移動」という概念を付与した。

3.3.2. 分析結果

興味の深まりの契機として、表4に示す「制度的な活動可能性の変化」という大カテゴリーと、それに含まれる3つのカテゴリー・7つの概念が生成された。そして、「制度的な活動可能性の変化」という出来事に含まれている学習環境との関係を表す3つの概念が生成された。

「制度的な活動可能性の変化」とは、ある人にとって文化的、共同的、制度的な枠組みの範囲内で活動できる内容が変わることを指す。アマチュア・オーケストラの場合、ジャンルや所属団体の特性が制度的な活動可能性を規定していた。それゆえ、団員は「制度的な活動可能性の変化」を経験することで、以前の興味では出会えていなかったオーケストラの面白さに出会い、それまでの興味と対比させるかたちで興味を深めていくのである。

具体的な「制度的な活動可能性の変化」とそこに含まれている学習環境との関係性には、以下で述べる3つの種類があった。そこでいう「共同体」とは、オーケストラなどの共同体のことである。これは、AZEVEDO

表4 契機としての制度的な活動可能性の変化と学習環境との関係

制度的な活動可能性の変化		学習環境との関係	該当者 (協力者*)
ジャンルの移動	吹奏楽からオーケストラへの移行	対照的な領域の共同体への移動と自覚	6
	オーケストラからの離脱と復帰		4
関与する団体特性の変化	新しい団体へ参加	同一領域内の対照的な共同体への移動	9, 10, 13
	新しい団体の組織		14
	外部での良い指導との出会い		9, 13
団内での位置の変化	役職の任命	共同体内での目標の構造化	1, 11
	熱心な仲間からの働きかけ		2, 4

(2011)が趣味のモデルロケットリー・クラブを例に、学習環境の「共同的」な要素として挙げている実践共同体に対応している。

(1) ジャンルの移動

2事例において「ジャンルの移動」が興味を深める契機になっていた。協力者6は、中学高校で吹奏楽部に所属したのち大学の部活でオーケストラを始めたが、その「吹奏楽からオーケストラへの移行」によって、吹奏楽では得られなかった打楽器の役割にオーケストラで出会い、「音楽的な無自覚からの脱出」を経験した。あるいは、協力者4は就職を機に「オーケストラからの離脱と復帰」を経験し、そのことによって自らの生活にオーケストラがあることを自覚するようになり、「参加すること自体の価値を見いだす」となった。

活動形態の異なる共同体への移動

「ジャンルの移動」という契機には、「活動形態の異なる共同体への移動」という学習環境との関係性が含まれていた。吹奏学とオーケストラ、オーケストラと仕事は、人数の編成やその中の個人々の役割が異なる。そうした活動形態の差異を認識することが結果としてオーケストラならではの面白さを際立たせることになるため、「ジャンルの移動」が興味を深める契機になったのだと考えられる。

(2) 関与する団体特性の変化

4事例において「関与する団体特性の変化」が興味の深まりの契機になっていた。引越（協力者9、13）や、エキストラの誘い（協力者10）といった偶然の出来事によって「新しい団体へ参加」すること、あるいは、自ら「新しい団体を組織」（協力者14）することによって、それまで所属していたオーケストラではできなかった活動のスタイルや面白さに出会い、興味を深めている事例があった。また、楽器の個人レッスンやワークショップを受け、所属団体の「外部での良い指導との出会い」を果たすことがきっかけとなっていた事例もあった。

活動理念の異なる共同体への移動

「関与する団体特性の変化」という契機には、「活動理念の異なる共同体への移動」という学習環境との関係性が含まれていた。オーケストラという同一の活動形態をとりつつも、個々の団体によって目標とする音楽性は異なる。それゆえ、ひとつの団体に所属し続けているだけでは、追求できる興味が限界がある。だからこそ、それまで所属していた団体とは異なる音楽性

を追求する団体に参加するようになることが、団員がオーケストラ領域のさらなる面白さに気づき、興味を深める契機になったのだと考えられる。

(3) 団内での位置の変化

4事例において「団内での位置の変化」が興味の深まりの契機となっていた。管楽器の演奏を率いるセクション・リーダー（協力者1）や、オーケストラの運営を率いる団長（協力者11）といった「役職の任命」をされることで、同じ団体に所属していてもそれまで出会っていなかったオーケストラの面白さに出会い、興味を深めていた事例があった。「熱心な仲間からの働きかけ」（協力者2、4）も同様に、その働きかけがあつてはじめて興味の深まりを促すことになっていた。目標を焦点化する役割付与

「団内での位置の変化」という契機には、「目標を焦点化する役割付与」という学習環境との関係性が含まれていた。個々の団体に参加することは、それだけで自動的に興味を深める契機になるわけではない。制度的に定められた「役職の任命」や、「熱心な仲間からの働きかけ」があることで、はじめて共同体内部での自らの役割が明確になる。それによって以前では意識されていなかった目標が焦点化されるため、「団内での位置の変化」が興味を深める契機になったのだと考えられる。

4. 結 論

趣味を長期的に継続する過程において、かつて感じていた面白さとの連続性のもとで、新たな趣味の面白さを抱くことがある。本研究は、この長期的な興味の学習を「興味の深まり」と定義し、趣味としてのアマチュア・オーケストラ活動において、学習環境との関わりにおいていかに興味が深まるのかを検討してきた。

その結果として、まずアマチュア・オーケストラにおいて興味の深まりには3つの種類——「音楽的な無自覚からの脱出」、「上達・達成へのとらわれからアンサンブルへ」、「参加すること自体の価値を見いだす」——があることが明らかになった。次に、興味の深まりは「ジャンルの移動」、「関与する団体特性の変化」、「団内での位置の変化」からなる「制度的な活動可能性の変化」が契機となることがわかった。そして、これらの契機には「活動形態の異なる共同体への移動」、「活動理念の異なる共同体への移動」、「目標を焦点化する役割付与」という学習環境との関係性が含まれていることが明らかになった。図2は本研究で得られた

結果から、アマチュア・オーケストラにおける興味の深まりと学習環境の関係を図示したものである。

5. 課題と展望

5.1. 興味の深まりに関して

「興味の深まり」概念によって、趣味を長期的に継続するなかでの面白さは一枚岩ではなく、「上達・達成へのとらわれからアンサンブルへ」向かうような展開も起こりうる事が分析できるようになった。「現時点でどのような興味が存在するのか」を調査・分類する試みは学校外学習にとどまらず教科教育においても一般的に行われているが（e.g. 田中 2015）、生涯を通じた学習の観点からも今後は興味の深まりに焦点化した研究も有効になるだろう。

アマチュア・オーケストラの場合、「上達・達成へのとらわれからアンサンブルへ」という興味の深まりの存在は、特に教授的な示唆をもつ。楽器演奏技術の上達は学習科学では「熟達」と呼ばれ、その支援も重要な研究トピックである（SAWYER 2014, p. 8）。しかし、演奏技術の熟達だけが促されても長期的にはマンネリや行き詰まりが見いだされてしまうならば、熟達だけでなく音楽の協同的創造（佐藤 2012）の面白さが感じられるような教授実践も必要となる事が示唆される。

本研究では個々の興味深まりの方向性に区別をつけずに分析をおこなってきた。だが、「上達・達成へのとらわれからアンサンブルへ」という音楽における協働的な方向への深まりと、「参加すること自体の価値を見いだす」という個人のアイデンティティの方向への深まりは質的に異なるものと考えられる。興味の深まりの方向ごとに学習環境の影響が異なるのか、といった詳細な問題の検討は、今後の課題として残されている。

5.2. 学習環境との関係に関して

明らかになった学習環境との関係のうち「目標を焦点化する役割付与」はオーケストラによって制度化されている部分もあったが、「活動形態の異なる共同体

への移動」と「活動理念の異なる共同体への移動」は、自分で新たに団体を組織した協力者14の場合をのぞき偶然の出来事によって引き起こされていた。趣味においてもインストラクターのような教育者の地位にある者は存在しているが、彼・彼女らの教授実践を観察するだけでは、本研究における興味の深まりと学習環境の関係は明らかにならなかっただろう。それゆえ、成人教育や社会教育といった「教育」の枠組みを前提とせず、あくまで「学習者としての趣味人」（LIU and FALK 2014）がどんな趣味の世界を経験し、学習環境との関わりの中で偶発性をともないつつもいかに活動を深めているのかを、社会・文化的アプローチ（e.g. COLE 1996）に基づいて検討していく必要がある。

逆に、偶然の出来事に左右されていた学習環境との関係をいかにデザインし、実践として興味の深まりを支えていくかは今後の課題として残されている。その際には、共同体への参加だけでなく「移動」をいかに支えるのが重要になるだろう。

5.3. 共同体の意味と領域固有性に関して

本研究の知見はアマチュア・オーケストラという単一の趣味に限定されたものである。知見の一般性やオーケストラの領域固有性を検討するためにも、他の趣味との比較は今後の課題となる。

その際に検討すべき点は、趣味における「共同体」の性質である。本研究の分析では、学習環境としての共同体がもつ影響の大きさが浮き彫りになった。その理由として、オーケストラが大規模で組織化された団体活動であることが考えられる。オーケストラは構成人数が30名から100名に及び、その中で弦楽器、木管楽器、金管楽器、打楽器のセクションに分かれ、さらにセクション内でヴァイオリンなど個々の楽器のパートに分かれる。その中で役割分担が明確にあり、団体ごとの音楽スタイルも異なるのである。こうした特徴があるために、一つの団体に所属することが強固に「制度的な活動可能性」を規定しうるし、そこから移動することが興味の深まりの契機になりやすいのだと考え

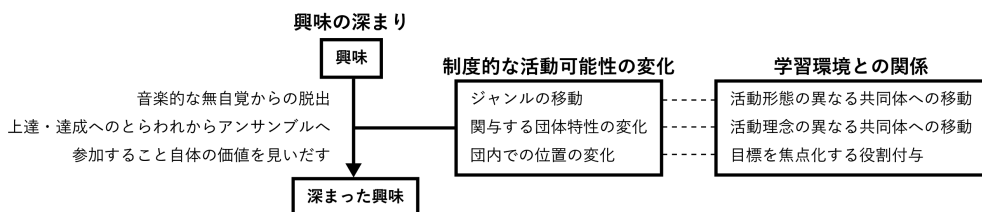


図2 興味の深まりと学習環境の関係

られる。

だが、必ずしもすべての趣味がオーケストラのような性質の共同体をもっているわけではない。写真撮影のように一人で実践できる趣味も存在する。またそのような趣味でもSNSなどの何らかの共同体に関与することは一般的にあるが、オーケストラにおける所属団体と、SNSのような共同体がもつ意味あいは大きく異なるだろう。学習環境としての「共同体」との関係性が趣味によっていかに異なるのかを解明するために、オンラインコミュニティなども視野に入れた比較研究が今後課題となるだろう。

謝 辞

インタビューに協力していただいたアマチュア・オーケストラ団員のみなさまに深く感謝いたします。

付 記

本研究は、杉山ほか（2017）で発表した研究を発展させ、その成果をまとめたものである。

参 考 文 献

- AINLEY, M. (1987) The factor structure of curiosity measures: Breadth and depth of interest curiosity styles. *American Journal of Psychology*, **39**(1): 53-59
- AZEVEDO, F. S. (2011) Lines of practice: A practice-centered theory of interest relationships. *Cognition and Instruction*, **29**(2): 147-184
- AZEVEDO, F. S. (2013) The tailored practice of hobbies and its implication for the design of interest-driven learning environments. *Journal of the Learning Sciences*, **22**(3): 462-510
- AZEVEDO, F. S. (2017) Hobbies. In K. A. PEPPLER (ed.), *The SAGE Encyclopedia of Out-of-School Learning*, SAGE Publishing, Los Angeles, pp. 345-348
- BARRON, B. (2006) Interest and self-sustained learning as catalysis of development: A learning ecology perspective. *Human Development*, **49**: 193-224
- BARRON, B. and BELL, P. (2015) Learning environments in and out of school. In L. CORNO, and E. M. ANDERMAN (eds.), *Handbook of Educational Psychology*, 3rd edition. Routledge, Abington, pp. 323-336
- BRICKER, L. A. and BELL, P. (2012) "GodMode is his video game name": Situating learning and identity in structures of social practice. *Cultural Studies of Science Education*, **7**(4): 883-902
- COLE, M. (1996) *Cultural Psychology: A once and future discipline*. Harvard University Press, Cambridge: 天野清（訳）（2002）文化心理学：発達・認知・活動への文化—歴史的アプローチ。新曜社，東京
- CORIN, E. N., JONES, M. G., ANDRE, T., CHILDERS, G. M. and STEVENS, V. (2017) Science hobbyists: active users of the science-learning ecosystem. *International Journal of Science Education, Part B*, **7**(2): 161-180
- GLASER, B. and STRAUSS, A. L. (1967) *The Discovery of Grounded Theory: Strategies for Qualitative Research*. Aldine Publishing Company, Chicago: 後藤隆，大出春江，水野節夫（訳）（1996）データ対話型理論の発見：調査からいかに理論をうみだすか。新曜社，東京
- GRATTON, L. and SCOTT, A. (2016) *The 100-Year Life*. Bloomsbury Information, London: 池村千秋（訳）（2016）LIFE SHIT. 東洋経済新報社，東京
- 畑農敏哉（2015）アマチュアオーケストラに乾杯！——素顔の休日音楽家たち。NTT出版，東京
- ITO, M., GUTIÉRREZ, K., LIVINGSTONE, S., PENUEL, B., RHODES, J., SALEN, K., SCHOR, J., SEFTON-GREEN, J. and CRAIG, S. W. (2013) *Connected Learning: An Agenda for Research and Design*. Digital Media and Learning Research Hub, California
- JONES, I. and SYMON, G. (2001) Lifelong learning as serious leisure: Policy, practice, and potential. *Leisure Studies*, **20**(4): 269-283
- LIU, C. and FALK, J. H. (2014) Serious fun: Viewing hobbyist activities through a learning lens. *International Journal of Science Education, Part B*, **4**(4): 343-355
- 文部科学省（2016）平成28年度 文部科学省白書
- 内閣府（2012）高齢社会対策大綱
- RENNINGER, K. A. and HIDI, S. (2016) *The Power of Interest for Motivation and Engagement*. Routledge, New York
- 佐藤公治（2012）音を創る，音を聴く：音楽の協同的生成。新曜社，東京
- SAWYER, R. K. (ed.) (2014) *The Cambridge Handbook of the Learning Sciences*, Second Edition. Cambridge University Press, New York

- SOSNIAK, L. A. (2006) Retrospective interviews in the study of expertise and expert performance. In K. A. ERICSSON, N. CHARNESSE, P. J. FELTOVICH, and R. R. HOFFMAN (eds.), *The Cambridge Handbook of Expertise and Expert Performance*, Cambridge University Press, Cambridge, pp. 287-301
- STEBBINS, R. A. (1992) *Amateurs, Professionals, and Serious Leisure*. McGill-Queen's University Press, Montreal
- 杉江淑子(2009)生涯学習社会における音楽教育研究. 日本音楽教育学会(編)音楽教育学の未来. 音楽之友社, 東京, pp. 252-265
- 杉山昂平, 森玲奈, 山内祐平(2017)成人の趣味活動における興味の深まりと学習環境の関係——アマチュア・オーケストラ活動に着目して. 日本教育工学会研究報告集, *JSET17-1*: 623-630
- 高橋かおり(2015)社会人演劇実践者のアイデンティティ——質の追求と仕事の両立をめぐる——. *ソシオロギス*, **39**: 174-190
- 田中瑛津子(2015)理科に対する興味の分類——意味理解方略と学習行動との関連に着目して——. *教育心理学研究*, **63**: 23-36
- 歌川光一(2008)カルチャーセンター研究史—生涯学習・社会教育研究における趣味講座の位置づけをめぐる試論的考察—. *生涯学習・社会教育学研究*, **33**: 67-77
- 山内祐平(2016)教育工学とインフォーマル学習. 山

内祐平・山田政寛(編著)インフォーマル学習. ミネルヴァ書房, 東京, pp. 1-16

Summary

How do learning environments support adults' hobby pursuits? Although recent research has focused on interest development and persistence in hobbies, this study proposes a new concept, "interest deepening," and seeks to reveal how interests in adult hobbies deepen through interaction with learning environments. In order to demonstrate this, an amateur orchestra was selected as a case study of hobbies, and 15 amateur orchestra musicians were interviewed retrospectively. The results show that interest deepening can be of three types: (1) awakening from musical unconsciousness, (2) turning to ensembles from expertise and accomplishment, and (3) recognizing the value of participation itself. The results also indicate that interest deepening is realized through three types of relationships to learning environments: (a) transference to another community with a different form of activity, (b) transference to another community with a different sense of values, (c) through a goal-focusing role assignment.

KEYWORDS: ADULTS, HOBBIES, INTERESTS, INFORMAL LEARNING, LEARNING ENVIRONMENTS, QUALITATIVE RESEARCH

(Received July 21, 2017)